

中央東

第 57 号
令和7年3月10日



仮説検証型教育研究のすすめ

研修委員長 門 倉 純 一
(沼垂小 平元年度)

はじめに

中央東支部冬の研修総会後の懇親会で、八千代会中央東支部代表の近藤文男様が、ときわ会が実践発表において仮説検証型教育研究を大切にしてきたこととお話しされました。仮説検証を行う際には、「妥当性」「客観性」「信頼性」の三つを大切にすることもお話しされました。このことについて、会員の皆様と紙面上で情報共有し、その意義について考察してみます。

仮説検証型教育研究とは

学校教育において、仮説検証をしながら授業研究を進めることは、児童や生徒の資質能力を高め、教育の質を向上させると言われています。では、仮説検証

型教育研究とはどのようなものなのでしょうか。

これについて、ときわ会の今年度の教育研究部門の説明によると、「研究仮説を立て、複数の実践を行い、その実践から研究仮説の検証を行う」とあります。仮説とは、一般的に「AならばXである」という考え方です。ところが、教育研究は、研究対象が人間や社会(集団)が関わるため、ひとつの事象に多様な要因が複雑に関わり合っています。それだけに原因と結果の関係をひとつに絞ることがしにくいこともあり、仮説を「Xであろう」としたり「程度の差はあるが多分Xだと言えるだろう」としたりする「曖昧さ」も認められています。すると仮説は「ど

のような場面や内容を設定し、どのような手立ての工夫をすれば、子ども(集団)に〇〇な変化が期待できる」という形になるのが一般的となります。^{*1}この研究方法のよさは、次の三点にあります。

一 肯定的変容を引き出す

仮説検証のプロセスは、教師が児童生徒(集団を含む)の成長を強く意識することとつながります。児童生徒の課題解決に向けて主体的に研究を進め、教師の肯定的変容が表れます。また、自動的に児童生徒の主体的な学びも促し、児童生徒の肯定的変容を引き起こします。教師にとっても児童生徒にとってもWIN・WINな効果です。

二 令和の日本型教育との関連

仮説検証を通じて、教師は児童生徒の学習状況や反応の観察、指導方法の効果を探ります。個々の学習スタイルやニーズに応じた指導方法及び協働して課題解決を図る指導方法の有効性を明らかにします。これは、令和の日本型教育で提唱されている個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実とも関連します。

三 データ処理の効果

仮説を検証するために、教師は児童生徒の個々の見取りやアンケート結果、学習カード等の記録などを、データとして一定の尺度から数値化し分析します。その集約結果を検定にかけ

るなどの方法で客観性を得ます。その際、複数の研究実践を比較検討することにより、客観性、有用性がより高まります。研究を論じるには、当然先行研究のデータを参考にすることが必要です。逆に、自分の研究結果も他の教員の研究に波及することになり、様々な方面に役立ちます。

まとめ

このことを論じていると、『研究』をしない教師は『先生』ではないと思います。という大村はま氏の言葉が頭をよぎります。働き方改革で様々なことが削減の一途をたどる中においても、教員が資質能力を高めるために研究という営みは必要不可欠です。特に、仮説検証型教育研究は、児童生徒を見る目、教員としてのやりがい(ウェルビーイング)をより一層高めます。

当支部のマイプロフィールの取組は、冬の研修総会でも多くの会員から肯定的な回答を得ていることから、今後も継続し、会員一人一人のキャリアアップを支援します。来年度は、ぜひ仮説検証型教育研究へのチャレンジをおすすめします。

*1 必読!教育論文を書くとき、絶対押さえておきたい10のポイント 公益財団法人日本教育公務員弘済会茨城支部 教育論文審査委員会
https://www.nikkkyoko.or.jp/updata/shibu/ibaraki/dl/774/20240425_251462.pdf